

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 24 年 4 月 30 日発行 第 10 号

腹を割って話しましょう ～JICA 地域復興推進員の仕事～

皆さんは JICA（ジャイカ）という団体をご存じでしょうか？学生の方には「青年海外協力隊」を途上国に派遣しているところとして馴染みがあるのではないのでしょうか。JICA 国際協力機構は外務省関連の独立行政法人であり、途上国のインフラ等に対する技術支援、資金支援、生活向上のための人的支援（協力隊等）を行っている団体です。

私は昨年 8 月から JICA の地域復興推進員として、東松島市の宮戸島で仕事をしています。「推進員」は東松島市（行政）と住民の間をとりもつ「中間組織」であり、行政の計画をわかりやすく住民に伝えたり、住民の様々な要求を整理して行政に伝えたりするのが主な仕事です。また、宮戸島は漁業従事者、特に海苔養殖業をされていた住民の方が多いところなのですが、津波被害により自宅や仕事の施設も失い、再建の意思があってもそれがままならない状況です。そのような漁業者の「後方支援」をするのも大きな役割です。

震災前、私は石巻駅の北側でクリーニング店、工場の経営をしていました。被災し、工場、機械設備、車両すべて失い、銀行からの借り入れだけが残りました。二重ローンの問題を抱えてまで事業を再建する気力がなく、とって経営者には雇用保険も適用されないの、市の緊急雇用でがれき置場での仕事やハローワークで就業相談員をしながら、国や県の二重ローン救済策を待っていました。何の施策もなく、時間だけが過ぎていく中、JICA 初の国内被災地支援事業としての推進員の公募がありました。3 年間という期限付きの仕事なので迷いましたが、地元（の隣の市ですが）の復興に関わりたいという思いが強く、応募を決め現在に至ります。



宮戸月浜区での住民会議

東松島市は被災前から「市民協働のまちづくり」を掲げ推進してきました。市内を 8 つの地区に分け（矢本地区、赤井地区等）、さらに区として細分化し、各区長さんを中心に住民自治を進めてきました。8 つの地区にはそれぞれ市民センターがあり、私は宮戸地区の市民センター（津波被害で建物が流失。現在は独ボッシュ社から寄贈されたコンテナハウスが仮施設）で、住民自治機能の復旧の支援をしています。

こう書くと、重要な仕事をバリバリこなして被災地支援をしているようなイメージを持たれると思いますが、実態はかなり違います（笑）。宮戸島に着任当初は明確な支援対象、目的があったわけではなく、「被災コミュニティの再生のため、地元住民と深く関わって住民ニーズを掴む」というお題目のみ JICA から要求されました。要するに地元の人と仲良くなって顔を覚えてもらい、いい関係を築いてからでないとなかなか本当のニーズが見えてこないからです。私は石巻の人間だし、すぐに溶け込めるから大丈夫と思っていましたが、宮戸は島内に集落が 4 つあり、それぞれ住民の気質が違うし確執もある。腹を割って話ができるまで、やはり時間かかりましたね。

宮戸の 4 つの浜（集落）のうち、3 つが津波被害で壊滅し、跡地には家の基礎しか残っていません。周りが奥松島の風光明媚な景観だけに、より一層痛々しく、胸が締め付けられるような風景です。それでも東松島の他の被災地域と違い、ここでは浜ごとに仮設住宅が建てられ、小さなコミュニティは被災前と同じく維持されています。また、この地区の景観、独自の文化、風習に引き寄せられるように多くの支援や有識者からの提案が寄せられています。他の地区に先駆けて市民センターが中心になり「復興まちづくり委員会」が立ち上がりました。3 つの浜の集団移転や跡地利用を話し合う、住民主体の会議なのですが、世界的な建築家の妹島和代さん（SANAA）が移転地のデザインを提案したり、とにかく先進的な話し合いが重ねられています。住民の方も積極的に議論に参加しているし、私も地域外委員として参加しているのですが、地元の委員さんから逆に教わることが多いです。

最後に PR。私が「後方支援」している宮戸月浜で海苔養殖業の再建に向かっているグループの HP のリンクです。一口オーナーで再建資金を募っていますので、ぜひご協力を！<<http://www.gekkoh7.jp>>

（四倉禎一朗）



大高森からの眺望

コンセプトを伝えるキラーフォト ～東北発☆未来塾に参加して～

私（末永）は、NHKのEテレ（金夜夜11時30分～11時50分）「東北発☆未来塾」という企画に参加する学生を募集している、という話をゼミを通して聞き、参加しました。

「東北発☆未来塾」とは、将来的な東日本大震災から、復興へ向かう人材を育てるための企画です。各界で活躍されている方々を講師として招き、その講師と学生達でワークショップやフィールドワークを行います。

私が参加したのは、この企画の内の一つで、テーマは「観光のチカラ」。観光のカリスマと名高い「星野佳路」さんを講師に、2月8～10日、青森県三沢市の青森屋（星野リゾート経営）で行われたワークショップに参加しました。

今回のワークショップには、石巻専修大学から5名、岩手県立大学から4名、山形大学から1名の計10名の学生が参加しました。これらの学生は、特に専門的な知識を持っているわけではありません。そのため、学校、学年が違う者同士が忌憚なく自分の考えや意見や主張、発表することが可能という特徴があります。

このメンバーで「東北の観光における本当の問題とは何なのか」「お客様を呼ぶには何が必要か」「地域の魅力を創り出すにはどうすればいいのか」といったテーマについて話し合い、最後に星野さんの考えを聞き学びました。

私の居たグループでは、部屋に戻ってから就寝時間を削り復興について話し合いをしました。このように、復興への思いや熱意が強い学生が多かったという事が、私が今回の企画に参加して良かったと思えた点でもあります。

他にも、星野さんの「震災前と震災後の問題で解決しにくいのは震災前で、震災前から引きずっている問題を解決できていないのが問題である」という話は、その通りだと思いました。また、今後の青森屋の盛り上げ方についての青森屋の従業員の方々の会議を直に見る事ができたのは、とても良い経験になりました。

星野さんの話で最も印象的だったのは、「キラーフォト」です。これは、観光地に来てもらうために、その旅行のコンセプトをヴィジュアルで伝える写真です。「観光地の魅力を伝えるには、観光地全体を撮影した写真を多用するのではなく、旅行のコンセプトに焦点を絞った写真一枚を使った方が良い」という言葉に感銘を受けました。

今回のワークショップに参加することによって、様々な経験を積むことができたことは嬉しく思います。私たち学生のような若年層がこれからを担う世代であるという現実を再認識しました。

私たちの世代に旅行をする人が少ないと星野さんは嘆いていました。この文を読んだあなた、軽い気持ちでぶらりと旅行に出かけてはいかかでしょうか？

（末永寛二）



「東北発☆未来塾」星野佳路さんと

心の痛みを感じながら ～大船渡市でのボランティア～

震災後の昨年4月、私は岩手県沿岸の大船渡市へボランティアに行きました。大船渡に着くと、ヘドロの匂いがとても臭く、びっくりしました。テレビで見た通りのガレキの山がそこにありました。

まず、始めに、ドロ運びや排水溝の掃除、ガレキの撤去などを行いました。臭いがきつい中での作業だったことが一番大変でした。

ボランティアの人たちは県外からも来ていました。その中には、家族を亡くした方もいました。自分の家族のことで頭が一杯のはずなのに、みんなのためにボランティアをしている姿を見て、とても感動しました。私だったら、きっとできないだろうと思います。

ガレキ撤去をしていると、津波で家や家族を亡くした方がいて、私は心が痛くなりました。ボランティア活動中に被災地の方から話しかけられ、「感謝している」という言葉をかけてもらいました。そのとき私はボランティアをしにきてよかったなあ、と感じました。

今、震災から1年が過ぎて、私の大学がある石巻市の復興が進み、町がきれいになってきました。きっと、大船渡もそうだと思います。が、被災者の心の傷は、なかなか消えるものではないと思います。

私は、ボランティアを通じて、普通の生活ではできない経験をすることができました。これから困っている人がいたら、手を差し延べていこうと強く思いました。

（菅野裕太）

ボランティアのお願い・提案

昨年8月の石巻専修大学でのアンケートから、ボランティアから行政、ボランティアセンター、災害復興支援協議会などへのお願い・提案を抜粋してお伝えします。

- 多少の指示を希望。
（友人と活動、介護＋写真洗い、東京、60代、女性）
- ボランティアの管理・規制をする人員に不足が感じられました。
（団体活動、がれき撤去、東京、30代、男性）
- ボランティアの参加をCMなどで呼びかける。
（団体活動、泥かき、ごみ処理、がれき撤去、神奈川県、20代、男性）
- 家を安く提供したらいい
（学校の参加のチラシで活動、草抜き、兵庫県、10代以下、男性）
- 重機などの機械の更なる導入
（団体活動、がれき撤去、千葉県、20代、女性）
- 日本中の自治体と連携して復興エリアを区切り、インターネットを通じて完了度をリアルタイムに見える化（後略）
（友人と活動、泥出し、神奈川県、20代、男性）

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp